

## 郷土の文学を読む

研究領域 平成7・8年度中学校教育課程研究 国語科  
研究主題 総合的な学習活動を生かした国語科教育の指導法

江口 修司・落 健一・金子 直樹・金本 宣保  
世良 馨子・竹盛 浩二・信木 伸一・藤原 敏夫

「郷土の文学を読む」という単元を設定して、井伏鱒二の作品・「軛の津とむろの木」  
— 大伴旅人物語 — (自主作成教材)の学習をとおして、井伏鱒二作品の教材としての可能  
性の検証と、身近かなところからの古典(万葉集)入門のあり方をさぐろうとする試みであ  
る。

平成8年度は、中学三年生での選択教科Ⅲ(国語科、社会科、音楽科の教科間選択授業・  
年間35時間実施)の中で、「郷土の文学を読む」学習をした。

- [研究方法] ① 国語の学力は全ての学習の基本となるものであり、他教科との関連におい  
て、さらに学校生活全体との関連において、教科の教育を計画し実践して  
いく。
- ② 国語科教育は言語の学習であるから、言語の能力を確実に習得し、その能  
力を活用する方法を身につけさせる。
- ③ 地域と結びついた文化を様々な活動をとおして学ぶなかで、国語の生きた  
力を身につけ、生涯学習の基となる力を養う。

### はじめに

青年期の成長は、内から外への発展と考えることができる。自分が生まれ青年になった郷土から、  
中央に、さらに世界へと場を広げていく。郷土というものは、生まれ、幼い時に生活した場所とい  
うものでなく、風土、文化としてとらえることができる。

一つは、備後地方の風土を色濃く備えている作家井伏鱒二の作品をとりあげた。井伏鱒二の作品  
は、高く評価されているが、現在の中学生には必ずしも親しまれているわけではない。福山の地で、  
学校生活を送り、学ぶ生徒たちが、井伏鱒二の作品を読むことで、郷土の風土、文化を自覚し、自  
分の成長について考えを深めることができると考える。

もう一つは、地元にある古くからの港、「軛の浦」の歴史を学び、それにかかわる万葉歌人大伴旅  
人の歌をよんだ。よまれた歌をとおして、人間旅人を身近かに感じることができ、その時代の文化  
を学び、合わせて古典(万葉集)に親しむきっかけとすることができると思う。

### 井伏鱒二作品の教材としての可能性の検証

(竹盛浩二の1995年度の実践研究から)

#### 1 はじめに

井伏鱒二は福山出身の作家である。そのいくつかの作品について、それが国語の教材としてどの  
ような可能性を持っているのか、検証を試みた。第一段階としてはアンケートを実施し、井伏作品  
の受容の実態をつかみ、次に第二段階は「山椒魚」の実際の授業を通して、その可能性を検証し

た。

ここに、その概要を整理して、問題点を確認しておきたい。

## 2 井伏鱒二受容の実態

井伏鱒二が郷土の作家であるということを伏せて、一学期に三回にわたってアンケートをおこなった。【注1】

第一回と第二回は一学期末に、第三回は夏休み明けにおこなった。対象は、一年、三年（中学）と五年（高校二年）の全員である。

このアンケートの集計結果【注2】からは、次のようなことを確認できる。

- ① 井伏を知っていた者の割合、その学年別傾向  
……………学年が上がるとその傾向が強まる。
  - ② 文学に不案内、井伏に消極的・拒否的態度である者の割合、その学年別傾向  
……………これも、学年が上がるとその傾向が強まる。
  - ③ 井伏を知っているということと、井伏を読んでいるということとの関係  
……………読むということが知るということである。
  - ④ 井伏を知ること、井伏を読もうとすることとの関係  
……………井伏を知ると、読むようになる。
  - ⑤ 井伏がどれほど郷土で知られているか  
……………平均して半数が知っている。
  - ⑥ 郷土の作家であることが、井伏を読むということにどう影響するか  
……………郷土の作家であるということを知って、読者は増加する。
  - ⑦ 井伏をどのように知りたいかということ、井伏を読もうとすることとの関係  
……………知ろうとすればするほど、読むようになる。
  - ⑧ 井伏への消極的・拒否的と見える態度と、井伏を読もうとすることとの関係  
……………井伏への消極的な態度は、読まないということではない。
  - ⑨ アンケート自体がもたらす、井伏を読もうとすることへの影響  
……………アンケートをきっかけに読者が増加した。
  - ⑩ 井伏の作品は、どの学年にふさわしいか  
……………作品にもよるが、ある程度学年が上がってからがふさわしいようである。  
潜在的読者層と読者層とをみると、「山椒魚」が適当のようである。
  - ⑪ 井伏の郷土で井伏を読むことの問題点  
……………作品の舞台やモデルが、生徒と関係がある場合がある。
- さて、以上のようなことを踏まえながら、授業では「山椒魚」を扱うことにした。

## 3 「山椒魚」の授業から

### (1) 「山椒魚」の作品構造にみる井伏の本質

授業者は、「山椒魚」の作品構造にみる井伏の本質を次のようにとらえた。

「岩屋」と「外」との、さらには「岩屋」の中での確執を通して、山椒魚は自らの観念的な世界に閉じこもっていく。その「岩屋」からの脱出の試みもむなしく、谷川の水中の生命の清冽な光景のなかで、山椒魚が絶望的な孤独を意識していくそのようすは、じつにリアルに描かれていく。

作者は、現実との遊離と隔絶を卑下・悲観する山椒魚に向けて、恥じらいの笑みを投げつつ、さらにはそういう心理を客観視することによって観念的孤独の悲しさを弁護・容認するというあざやかなパラドクスにおいて、あたたかなまなざしを山椒魚に注いでいる。

山椒魚の悲哀を直視しながら読んできた者は、作者のこのあたたかなまなざしを肌で感じとりながら、沈黙の中に全神経をゆるやかにし、谷川の水中の生命の光景を客観的に、かつおおらかに眺めることができるようになっていく。そして「岩屋とそれを取りまく深い世界」を想像する時、さまざまな対立を超え、ついには統一的な深い生命観に到達することとなる。

## (2) 授業の実際

時期：1995年9月（合計7時間）

対象：中学三年生A～C組

教材：井伏鱒二「山椒魚」

大江健三郎 講演「井伏さんの祈り、私の祈り」（新潮カセット）

（1994年11月20日福山市民会館ホールにての講演「井伏さんとリアリズム」を改題して収録したもの）

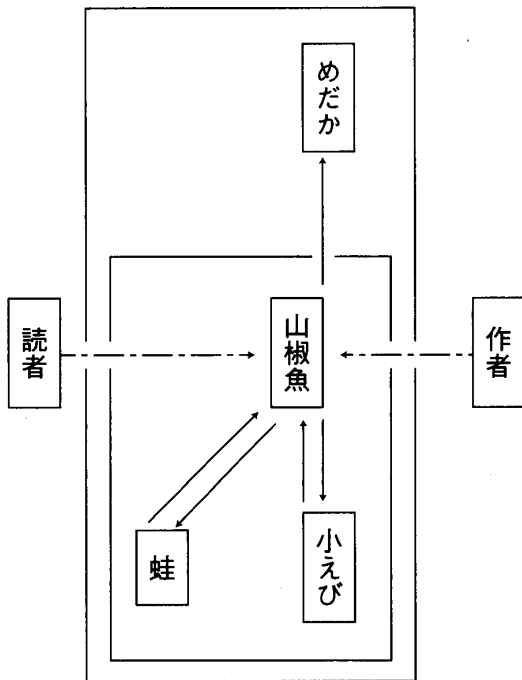
展開：1 「山椒魚」を読む（指名読み、展開に沿っての読み）	}	…………… 2時間
2 構造図を提示し、視点を決めて思いを書く		
3 生徒の把握を確認していく	}	…………… 2時間
4 二つの本文読み比べ、自分の「山椒魚」を語る		
5 生徒の考えを確認していく		…………… 1時間
6 大江健三郎「井伏さんの祈り、私の祈り」を聴く		…………… 2時間

## (3) 「山椒魚」の限界と可能性

「それにしても山椒魚って普通じゃない。人間でゆうと、何かすごく正直で、思ったことに夢中になって、まっしぐら人間で、生徒会とかに入ってそうな人かも。」というような思いを「小えび」の立場で書いた生徒がいる。ミニスカートにルーズソックスの女子生徒である。このようなノリの「若者」には、山椒魚の「屈託」はどうにも理解できないものである。あるいはまた、多くの生徒が、自然の風景の印象的な描写がどうもイメージできないようである。本校の生徒もすでに、都会の文明の渦に巻き込まれたのか。

二つの本文を読み比べ、どちらの「山椒魚」がよいかを書かせた時、次のようなものがあつた。非常に繊細な感性をもっている男子生徒のものである。「どちらも同じ。僕にとっておもしろくない

## 「山椒魚」の構造



作品だということに変わりはない。山椒魚が蛙と仲良くしようがどうしようが、僕は山椒魚が嫌いである。一目見ただけで好きになれるものが世の中にあるように、僕にとってこの山椒魚は『嫌い』の塊に見えた。だから僕はこの作品が嫌いである。山椒魚が蛙とどうなろうが知らないし、関係ないし、興味がないし、必要ないのだ。」決定的な拒否反応を示している。「山椒魚」の自照性の強さゆえにか、このような生徒も現れてくる。

そもそも、今日の疎外状況の中で孤独である生徒たちに、「山椒魚と蛙」に見る「共同体」が見えるのかどうか。いやいや、だからこそ見えるのだといたいのだが、すでに都会の文明の波に生徒たちはさらわれてしまい、しかもかくのごとく強烈な「自照性」をもって生徒をはじき返す作品とあれば、授業者もいささか不安にかられてしまうのである。

確かに、「山椒魚」には生徒たちに読ませる上で、いくつかの限界があるようでもある。

はたして、教室という場において展開される集団としての読みにおいて、このような問題がどのように可能性へと転じてゆくことになるのか。

さて、展開2の構造図（上図）は、「山椒魚」を生徒が読む時に提示し、生徒の読みの視点を決めさせるものとなった。生徒はこの図のどれかひとつの矢印の視点で、その思いを書いた。

生徒の書いたものを整理してみて、先ず目につくのが、山椒魚と蛙の関係を直視する生徒が一番多いということである。A組の場合42人中25人がこの視点での思いを書いている。そのうち、三人のものを引用してみる。（傍線は引用者。以下、同様。）

■仲間が出来たのだ、と山椒魚は意識し、その事実に喜び震えた。蛙とのつながりは友情などではなく、互いの憎悪。それでもいい、とりあえず、仲間を無理やりでも作ることも可能だったのだ。ああ、神様御覧下さい。私があこがれ、かいま見た蛙が、今は私の手の内にいる。何て快感なのでしょう。ええ、軽蔑なさっても結構。私はただ一緒に話せる相手が出来たらそれで良いのです。……しかし、何ということでしょう！私が蛙を思いのままにできると思ったのは幻想だったのでしょうか？あいつは、外に出たいくせに、私におべっかを使い良き話し相手になるところか、くほみにこもってしまい、私の脅し文句に反発すらする。何ということでしょう！あいつは私が動かないと外へ出れないくせに、何と傲慢なんでしょう！ああ神様、このままではばかにされてしまう、……もう疲れてしまったのです。ただ、独りぼっちがいやなだけに蛙を引き込んだ私はまぬけです。しかし、売り言葉に買い言葉、引き下がることはできません。神様、私は疲れてしまいました。私にこの沈黙は苦し過ぎます。嘆息すらも出来ません。……神様、もう疲れてしまいました。（N）

■山椒魚は、前に蛙が自由に泳ぎ回って、自分をうらやましがらせた分、倍にして苦しめてやろうと思ったから、三年という長い間、岩屋に閉じ込めたんだろうと思ったけど、もしかしたら、友達になりたかったんじゃないかと思直しました。自分はもう岩屋から出ることは出来ないし、この蛙のようにドジして岩屋の中に入ってくるやつはそうそういるもんじゃないから、少しでも長い間一緒にいたかったんじゃないかな。自分の気持ちを素直に伝えることが苦手だったんだと思います、この山椒魚は。だから「悪党」と誤解されてしまったんだなあ。かわいそう。(D)

■蛙は、はじめ自分にとって同じ状態におくことによって、痛快に思ったというように自分の苦しみを味合わせるためのうってつけの相手、つまりいじめ相手だったんだと思う。でも一年目、二年目、三年目と夏が過ぎる中、蛙とはたくさん口論している。一年目の時は、ただ閉じ込めるといようなガキ大将のような立場から、二年目、自分が蛙の弱みを言い、蛙も負けずに弱みを言うというような対等(?)な口論に変わってゆく。そこで三年目、自分も相手も口論をやめ沈黙になる。それもいつのまにか、自分が上の状態だったというような立場から対等な立場となってしまって、しまいには蛙と嘆息が漏れないようにと我慢比べをしてしまっている。結局、自分は蛙のことをいじめっ子として見ていたが、ライバルになってしまっているのではないか。自分は今までのめだかや小えびとちがった気持ちを蛙に持っていると思う。(T)

結構多くの生徒たちが、そこに「仲間」「友達」「ライバル」といったものを読み取っている。このような関係を実に半数以上のものが読み取っているのだ。

また、読者として、あるいは作者の視点で、以下のように書いたものがある。

■作者は山椒魚のことを嘲笑してはいけないと言っているが、自由な身のこっちから見れば、山椒魚は少し異常で、行動の一つ一つを笑わずにはいられない。はじめの山椒魚は自分の不自由に気付かず、めだかや小えびを嘲笑していたが、自分も同じ状態にあると気がついた時には、神にすがってしまう。こんな姿を見ていると、山椒魚は気が狂う前から、やはりおかしかったのではないかと思ってしまう。だいたい、ふつうのやつなら、二年もの間、自分の住みかである岩屋に閉じこもっているはずがない。山椒魚には情けを感じるけれども、やはり笑わざるを得ないおかしなやつである。(K)

■最後あんなことを蛙にするのなら、一生岩屋に閉じ込められることをあわれとも思えない。蛙と闘って生きればいいのか。がんばれ、生きろ!(I)

■読み手から山椒魚を見ると、何とも馬鹿な意地を張る奴だという感じを受けるが何となくそれも解る気がする。特に一人で閉じ込められた時の山椒魚の言動が、内心の不安や恐怖、さびしさなどが、いかに強がっていても、手に取るように解る。それは作者の表現の上手さと、山椒魚自身の個性なのだろうと思う。特に山椒魚が蛙を閉じ込めるとい行為は、すでに共感さえ覚えるほどに巧みな表現だ。蛙と山椒魚の口論などは、こんなむなしさに本気で言いあう両者の気持ちが、実におもしろい。

最後のため息は、いかに言いあってもここから出ることは出来ないというあきらめの

ため息だろうか。(K)

■山椒魚の境遇に同情し、あわれんでいる。また、山椒魚の心理状態を客観的に観察して理解を示し、読者から軽蔑されるのをかばおうとしている。(M)

■山椒魚は我が心の分身であり、また、みなも、一度は、こんな経験をしたのではないか。この山椒魚の好きなところは、孤独に陥っていくところで、蛙が入ってきて、多少元気になってゆき、また、しずかになるところだ、と思う。作者自身も、山椒魚を途中で終わらせているところが、山椒魚に対しての思いが深いということだろう。蛙とのやり取りを途中で終わらせることにより、よりいっそう蛙と山椒魚のつながりを強めている、と思う。

読者に対して、山椒魚への思いを考えさせるのは、山椒魚のように一度はなるから、先を読んで進めということが言いたいんだと思う。作者は山椒魚がこの上なくかわいいんだと思う。(U)

このように、「読者」や「作者」の視点で読む生徒の数は少ないが、これらの生徒は、山椒魚を相対化しつつ、山椒魚に対する「笑い」と「愛情」のパラドックスをつかみ、山椒魚への理解を深めていっている。

二つの「山椒魚」本文を読み比べ、どちらがよいかを書かせたら、改稿後の方がよいというものが圧倒的に多い。その中の一例。

■右の文章を最後につけると、内容が、「岩屋のなかで二年の間いがみ合ってきた二人が、自分でも気づかないうちに、本心は相手をそれほど嫌っていなかった。」という内容になる。こんなありきたりな文章は、はっきり言って駄作である。ボツだ。ドラマではないのだ。それよりは、右の文章を取って、くだらない意地を張り合う二人をおかしく思い、人間と同じような感情を持つ二人と自分を重ね、その後の展開について想像をふくらました方がいい。一件落着しては駄目なのだ。(T)

和解が安易にもたらされることのない人間関係を、ユーモアで包みこんで受け止めようとしている。井伏の本質を読み取ったものとしてよいだろう。

さらに、もう一例。

■作者は今まで暗闇の中から外の光を見る。苦痛の中から希望を見、その希望を見ないようになったことで苦痛をいつまでも味あわなければいけないということを書いてきた。それが、最後に平和になってしまったのでは、苦痛の中から希望を見るということを大事だと書いてきたことが無駄になってしまうから、カットされた方がいいと思う。(M)

このようにみてくると、生徒たちの感性は、井伏に触れたといえるだろう。

集団の読みにおける相互深化ということがある。集団で読むということの特性が、教室の中で発動することになるのだ。生徒はさまざまな視点からの読みをお互いに出し合い、授業者はそれらをさまざまな形【注3】で提示し、生徒に確認をしながら読み進めていく。そのなかで、各々の読みは相互に深化していくことになる。一人の生徒の読みが、みんなの読みを一気に切り開いていく場合もあるのだ。

「山椒魚」という作品は、教材としてはたしかに大きな困難を抱えている。山椒魚の内面としての「屈託」は捨象的な苦悩であり、山椒魚の位置としての「岩屋」は暗い幽閉世界であって、この「深淵」と「暗闇」の、そしてそれを羞恥のまなざしでみつめる「深淵」と「暗闇」の位相は、読者である生徒たち若者の位相と、どうもずれているようなのだ。けれども、その感覚は授業者の感覚であって、その不安をよそに、生徒たちは「山椒魚」の真実に迫っていったと思われる。紹介したような読みを生徒たちが教室の中で提示し合えたという事実が、何よりも大きい。

#### 4 井伏鱒二作品の教材としての可能性の検証

「山椒魚」と若者の、位相のズレということを授業者は心配した。ところが、山椒魚の苦悩が捨象的な苦悩であるために、またその位置が暗い幽閉世界であるために、生徒たちの想像力によってかえってその溝が埋められたのかもしれない。そういう意味では、「山椒魚」はやはり若者の作品である。

「山椒魚」を切り口にして言えることでしかないのだが、「岩屋とそれを取りまく深い世界」から考えを深めるということがある。それを「郷土の風土、文化」からの視点だと、即断するつもりはない。しかし、やはりひとつには、このように生命的であたたかな視座を、井伏は与えてくれそうである。

さらにひとつには、「典型」ということがある。手垢にまみれたことばで言えば人間の姿ということなのだろうが、「岩屋とそれを取りまく深い世界」から人間をみつめるということが、さまざまな人間を読むということが、可能となる。

#### 5 今後の課題

全体の研究計画の中で、特に「地域と結びついた文化をさまざまな活動をとおして学ぶ…」という観点があり、「井伏鱒二を中心に、福山地方の近代の文学を学ぶ。」という研究内容が明示されている。

さて、「福山地方の近代の文学を学ぶ」とはどういうことなのか。やはり井伏なら井伏を読むということではかないような気がするのだが、どうなのだろうか。

## 井伏鱒二アンケート（第1回）

（ ）年（ ）組（ ）番

名前（ ）

※ 次の項目について、「はい・いいえ」のどちらかに○をつけたり記入項目欄に書いたりして、回答して下さい。

（1）「井伏鱒二」という作家を知っていますか。

（はい ・ いいえ）

（2）井伏鱒二の作品を読んだことがありますか。

（はい ・ いいえ）

（「はい」に○をした人）どのような作品を読んだのですか。

◎井伏鱒二という作家を知っていた人も、知っていなかった人も、家に帰ったら、井伏鱒二について聞いておいて下さい。

## 井伏鱒二アンケート（第2回）

（ ）年（ ）組（ ）番

名前（ ）

※ 次の項目について、回答して下さい。

（1）井伏鱒二という作家を知っていた人も、知っていなかった人も、家の人に聞いてみて、どういことがわかりましたか。

（2）井伏鱒二という作家についてどういことを知りたいですか。

（3）井伏鱒二の作品で何を読みたいですか。

次の作品（別紙の作品案内を参考）に○をふたつつけて下さい。

①山椒魚

②鯉

③朽助のゐる谷間

④屋根の上のサワン

⑤川

⑥さざなみ軍記

⑦黒い雨

⑧その他（ ）

【注1】



井伏鱒二作品案内 (アンケート2 別紙)

「山椒魚」

すみかとしていた渓流の岩屋の中でうかつにも二年間を過ごしてしまった山椒魚は、外に出ることができなくなってしまった。彼の頭は岩屋の出入り口より大きくなってしまったからである。どう嘆いてみても、いい考えは浮かんでこない。

ある夜、小鯉が産卵のためにまぎれ込んでくる。岩と間違えられたと思った山椒魚は外に出ようとするが、いろいろ試みてもだめであった。そして、次にまぎれ込んできた蛙を、閉じ込めてしまい、二人は口論となる。……

「鯉」

学生時代に友人から立派な白い鯉をプレゼントされた私は、その鯉を大切にすることを誓う。下宿の池でかうことにした。やがて池のない下宿が変わることになって、鯉は、前の下宿の池にそのまま放し、そして次にはその友人の愛人の家の池に放していった。

友人は六年後に病気にかかって死んでしまう。そこで私は、友人の愛人の家の池の鯉を持ち帰り、大学のプールに放してやるのであった。しかし、……

「朽助のゐる谷間」

朽助は、七十七歳になる老人である。私は、子供のころから、このハワイ帰りの朽助の世話になっている。都会で不遇の文学青年の暮らしをしている私は、ある時、朽助の孫のタエトから手紙を受け取る。ダムが完成し、自分達の村が人工湖の底に沈んでしまいが、彼はどうしても立ち退かないというのだそうである。……

「屋根の上のサワン」

私は、とある岸辺で一羽の苦しんでいる雁を見つけ、治療をして助けてやる。すっかりよくなった雁は、「サワン」と命名され、やがて秋になり、サワンはかん高い鳴き声をするのであった。……

「川」

川の上流の溪谷から谷間を経て海に流れ注ぐまでの、その流域に繰り広げられる人々の暮らしや風景を描いた作品である。途中、淵や州の描写があったり、渦や流れの描写があったりする。

「さざなみ軍記」

前書きには、次のように記してある。「寿永二年七月、平家一門の人々は兵乱に追はれて帝都を逃亡した。次に示す記録は、そのとき平家某の一人の少年が書き残した逃亡記である。ここに私はその記録の一部を現代語に訳してみる。」

逃亡記の書き手は、「平家物語」でも勇敢な武将として描かれ、壇ノ浦の戦いで敗れて入水した平知盛の息子知章ということになっている。敗走する一六歳の少年の内面が、瀬戸内海の室の津(現在の福山の鞆)を主な舞台にして描かれていく。

「黒い雨」

「黒い雨」は、広島に原爆が落とされた直後に降った雨のことである。閑間重松の娘の矢須子は爆心地から十キロほどの古江というところに行っていたが、自宅に戻る途中にその「黒い雨」に打たれ、そればかりではなく、爆心地の瓦礫の中を這いまわったらしい。その彼女にはやがて、原爆症の症状が現われてくる。

重松は心を悩ますのである。被爆直後の彼は、妻シゲ子と矢須子とを連れて、地獄図のような広島街をさまよひ、勤め先にたどりついて奇蹟的に生きのびたのだが、その記憶が自責の念とともに、今あざやかに浮かび上がってくるのである。

井伏鱒二アンケート (第3回)

( ) 年 ( ) 組 ( ) 番  
名前 ( )

「井伏鱒二」を読みましたか。( ) 内に○をつけて下さい。

(これまでに読んでいたものも含めて)

▽読んでいない。( )

▽読んだ。( ) ☆☆ 一口感想 ☆☆

何を読みましたか。

- ① 山椒魚
- ② 鯉
- ③ 朽助のゐる谷間
- ④ 屋根の上のサワン
- ⑤ 川
- ⑥ さざなみ軍記
- ⑦ 黒い雨
- ⑧ その他

(番号に○を)

◇これで、3回にわたるアンケートはおしまいです。

【注2】

井伏鱒二アンケート（95年7月・9月 計3回）集計分析

(1) 「知っていたかどうか」を起点に

今まで	知りたいこと%	1年	3年	5年	合計
井伏を 知って いた  275	作家について	15%	35%	28%	26%
	郷土との関係				
	文学について	14%	20%	28%	23%
	大江との関係	0%	0%	1%	1%
	なし	7%	13%	24%	16%
	小計	36%	68%	81%	66%
井伏を 知って いなかった  144	作家について	24%	19%	4%	13%
	郷土との関係				
	文学について	20%	10%	7%	11%
	大江との関係	0%	0%	0%	0%
	なし	20%	3%	8%	10%
	小計	64%	32%	19%	34%
合計		119	102	198	419

(2) 「家の人に聞いたこと」を起点に

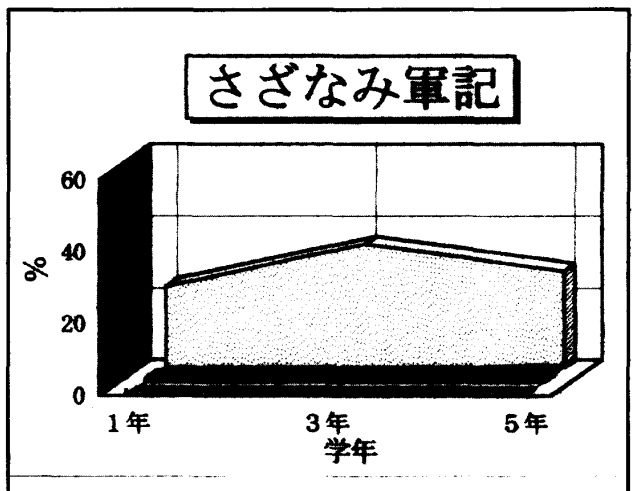
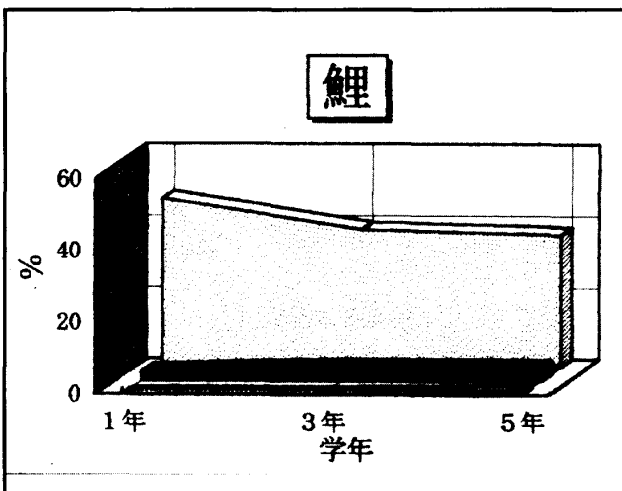
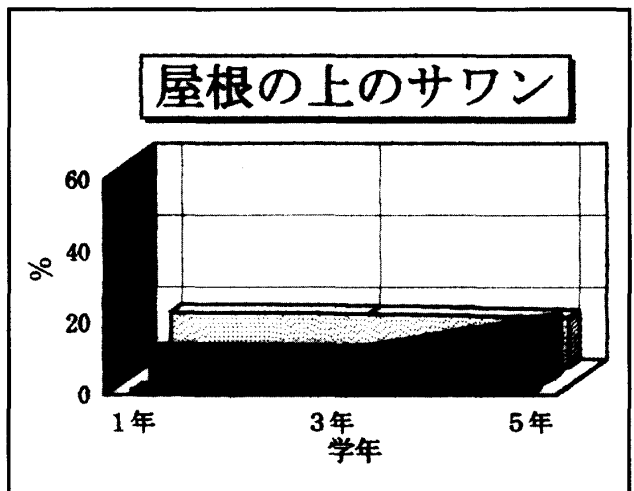
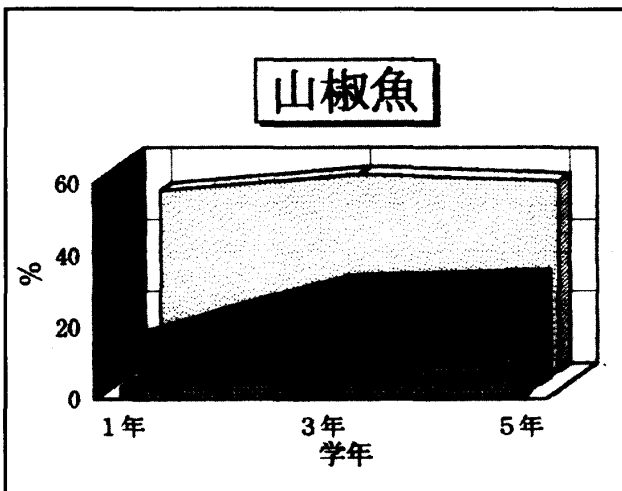
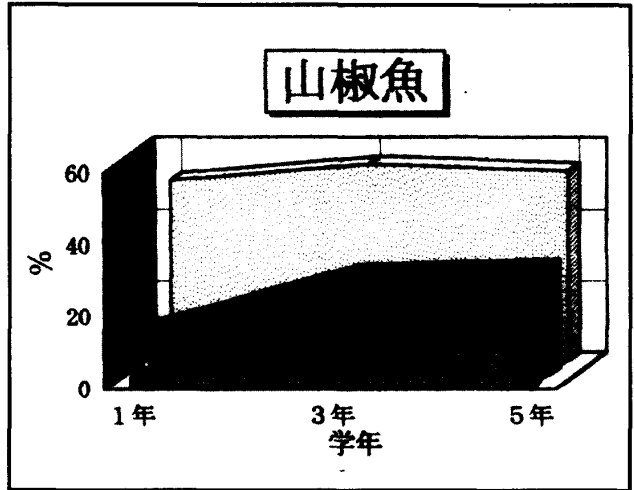
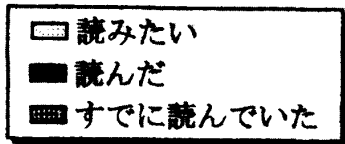
井伏を 知って いた	読んだ ことが ある	聞いたこと (%)	学 年 別				読者増加人数（1・3・5年全体）		
			1年	3年	5年	合計	山椒魚	サワン	黒い雨
9%	2%	作家について	10%	15%	11%	11%	+3	+4	+3
23%	5%	郷土との関係	39%	56%	16%	32%	+23	+16	+16
5%	1%	文学について	15%	9%	5%	9%	+7	+8	+2
1%	1%	大江との関係	0%	5%	1%	1%	+1	+0	+2
28%	10%	なし	36%	15%	67%	46%	+10	+11	+2
66%	19%	合計	119	102	198	419	+44	+39	+25
275	81								

(3) 「何を知りたいか」を起点に

井伏を 知って いた	読んだ ことが ある	知りたいこと (%)	学 年 別				読者増加人数（1・3・5年全体）		
			1年	3年	5年	合計	山椒魚	サワン	黒い雨
27%	7%	作家について	40%	54%	33%	40%	+22	+23	+27
25%	5%	郷土との関係							
1%	1%	文学について	34%	30%	35%	33%	+21	+13	+8
13%	6%	大江との関係	0%	0%	1%	1%	+0	+1	+0
		なし	26%	16%	31%	26%	+15	+9	+11
66%	19%	合計	119	102	198	419	+58	+46	+46
275	81								

【注2】

(4) 井伏の作品を読む傾向が学年でどのようにちがうか



改稿前のある方がよい

- (a) 改稿前の方が好きだ。  
この部分が続くと、急に変わった山椒魚と蛙に、少し戸惑って、なんだか「作ったような話」になる気がする。けれども、私は、この部分を読んで、ほっとしたのである。
- (b) 後悔している様子を蛙に隠そうとしない山椒魚がかわいく思えたし、かわいそうな蛙の優しさが感じられて、良いなあ。
- (c) 改稿前の方が、今まで口論していた二人の優しさが感じられる。二人とも素直な感情表現をするにはてれくささがあっただろう。けれど、この友情は決して中途半端なものではないと思う。同じ環境で同じ思いをしてきたのだから。
- (d) 雰囲気にあたたかみが出てくると思うから、ある方がいい。
- (e) なんとなく読んだ後、自分の心がすっきりする。
- (f) 最後の蛙のことばで何か「ほっ」とするので僕は改稿していないものが好きです。
- (g) 私は改稿前の方がいい。だってその方が、やさしい。蛙も山椒魚も。それに、私は最後の蛙のことばが好きになった。「遠慮がちに」とは、とっても味があつていい。どういう事態に生まれたものであつても、やっぱり友情はいい。

おとなしくなった二人の瞳の色がわかる気がする。

どちらもいやだ

- (o) どちらも同じ。僕にとっておもしろくない作品だということに変わりはない。山椒魚が蛙と仲良くしようがどうしようが、僕は山椒魚が嫌いである。
- 一目見ただけで好きになれるものが世の中にあるように、僕にとってこの山椒魚は「嫌い」の塊に見えた。だから僕はこの作品が嫌いである。山椒魚が蛙とどうなるかが知らないし、関係ないし、興味ないし、必要ないのだ。

改稿前のある方がよい

- (a) 私は改稿後の「山椒魚」の方が好きです。なぜなら、「自分の嘆息が相手に聞こえないように注意したで終わっている方が、その後、山椒魚と蛙がどうなったかというのを自分で好きなように想像できるからです。沈黙はずっと続いたまま、何年もたったのか、先に山椒魚が嘆息を漏らしたのか、それとも蛙の方が先だったのかいろいろ考えられるけど、結末が書いてあると、それ以外考えられなくなってしまいうから、改稿後の終わり方は、読者に創造力を試しているようで好きだった。この二匹は出会う前から結ばれた離れられない何かの縁があったようだ。
- (b) 右の文章を最後につけると、内容が、「岩屋のなかで二年の間いがみあつてきた二人が、自分でも気づかないうちに、本心は相手をそれほど嫌っていなかった。」という内容になる。こんなありきたりな文章は、はっきりいって駄作である。ポツだ。ドラマではないのだ。それよりは、右の文章を取って、くだらない意地を張り合う二人をおかしく思い、人間と同じような感情を持つ二人と自分を重ね、その後の展開について想像をふくらました方がいい。一件落着しては駄目なのだ。
- (c) 山椒魚がかわいいと思う作者としては、本文が続いて「蛙が息絶え絶えになつても山椒魚のことをおこつてはいない。」となつていたら、山椒魚はますます相手に対する罪悪感の重圧に耐えなければいけなくなつてゆくことがかわいそうで、いやだった。私も無い方が好きです。
- (d) でも、今ごろ和解してももうどうにもならないという悲しさがある。それに山椒魚や蛙の弱気な姿、惨めな姿はあまり見たくない。
- (e) その結果、蛙を餓死させてしまうのだが、もし相手が自分を恨みながら死んでいくならまだしも、自分を許して、しかも従容と死んでいくなら山椒魚は一生後悔するだろう。だから最後の部分はない方がいいと思う。
- (f) カットされた「山椒魚」の方がよいと思う。山椒魚を自分に置き換えてみたら、最後の結末が一つで決まったら、みんなが同じだから意味がないと思う。現実の世界で考えてみると、そんなに簡単に仲直りできないと思う。自分が山椒魚と同じ心境になった時に、最後の仲直りまで、他人（作者）に手伝ってもらうのはいけないから、途中で切つて仲直りするなら、自分の力でしなさい、ということだと思ふ。自分を知っているのは、他人じゃなくて自分だと思ふ。

## 「鞆の津とむろの木」―大伴旅人物語―

(藤原敏夫の1996年度の実践研究から)

### 学習のねらい

中学三年生を対象とした学習において、自分たちの身近な所にある古典の世界へ足をふみ入れ、当時の人々の心にふれる。すなわち、わたしたちの町の古い港「鞆の津」と、それにかかわる大伴旅人の歌をよむことにより、万葉人の心にふれ、「万葉集」に親しむきっかけとする。

また、この学習をとおして、郷土の風景の中に歌（文学）のあることを知り、郷土を見直し、郷土を大切に作る心を養う。

### 学習計画（10時間）

- 第1時 オリエンテーション（予備調査、校内の「むろの木」と歌碑の確認）
- 第2時 「むろの木の歌」（446・447・448）に表れている旅人の心（1）とはどんなものか、まとめる。
- 第3時 グループ（6班）ごとに、一首を決めて、参考資料等を使いながら、ことばの意味を確かめ、自分たちのことばで口語訳をつくる。（印刷して、次時に配布）
- 第4時 前時に作成したプリントをもとにして、「むろの木の歌三首」について、それぞれ旅人の心（2）をまとめる。
- 第5時 教材「『鞆の津とむろの木』―大伴旅人物語―」（資料参照）を配布、旅人の歌とその生涯の概要を知る。
- 第6時 「鞆の浦」古典教室……現地学習会を実施。「鞆の浦歴史民俗資料館」の池田一彦氏の話聞き。
- 第7時 現地学習会で感じたことをもとにして、自分の気に入った一首を選び、「旅人の立場にたって、歌ができるまでの旅人の心（3）」を、400字程度でまとめる。
- 第8・9時 旅人の歌をくわしくよみながら、旅人の生涯を知る。
- 第10時 都の自宅にいる旅人が、「『鞆の浦の思い出』をかたる」（4）という形で、200字程度でまとめる。

### 生徒のとらえた「旅人の心」―段階を追って―

A・B・Cの各生徒の（1）～（4）段階のとらえ方を整理したものである。

446	わぎもこ 吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世 <small>とこよ</small> にあれど見し人そなき
-----	---

(1) 「吾妹子」「妹」が旅人の妻のことを表していること以外、何の知識もない状態でとらえた「旅人の心」

A

神様も見ることがないような（めずらしくて美しい）鞆の浦のむろの木を、妻にも見せてあげたい。 ※むろの木を気に入っている？



(2) ことばの意味・口語訳を知ったうえでとらえた「旅人の心」

A

むろの木は、寿命をつかさどる神の木とみなされているのに、なぜ、それをいっしょに見た妻は死んでしまったのか。むろの木は、今もあの時と変わらずにあるのに、なぜ妻はもういないのか。（さみしさ・むろの木へのやつあたり）



(3) 「鞆の浦」現地学習会後とらえた「歌ができるまでの旅人の心」

A

旅人は、妻が亡くなってから、ずっと妻のことばかり考えていた。どうして死んでしまったのか。なぜ、もう私のそばにいないのか。

その思いは、鞆の浦へ来た時、むろの木へとぶつけられた。—そういえば、ここのむろの木に、私たちは願をかけていたな。寿命をつかさどる神の木だなんて、よく言えたもんだな。

私の妻は死んでしまったのではないか。私の妻を、妻を……。

冬の荒れた海は、まるで、あまりの悲しみに、荒れてしまった旅人の心に共鳴しているかのようにだった。

そして……旅人はすべて分かっていた。妻が死んでしまったのは、むろの木のせいでも、だれのせいでもない。妻は本当に死んでしまったのだ、と。



(4) 帰京後、自宅で「『鞆の浦の思い出』を語る旅人の心」

A

今、こうして考えてみると、鞆の浦には、人生の中で感じるすべての思いがつまっているような気がする。妻といっしょにむろの木を見た時は、本当に楽しかった。一人で見た時は……なんとも言えない苦しさや悲しさがあった。

でも、今となってはすべて過去のこと。老い先短い私にとっては、もう、ただの思い出となってしまったよ。

447

鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘らえめやも

(1) 「吾妹子」「妹」が旅人の妻のことを表していること以外、何の知識もない状態でとらえた「旅人の心」

B

鞆の浦のむろの木が妻に見えるほど、妻が忘れられなくて、悲しい。



(2) ことばの意味・口語訳を知ったうえでとらえた「旅人の心」

B

妻のことを忘れようとしているのに、忘れられない。むろの木を見たら、妻との楽しい、悲しい日々が思いだされる。



(3) 「鞆の浦」現地学習会后とらえた「歌ができるまでの旅人の心」

B

太宰府に行く途中鞆の浦によったとき、妻といっしょにむろの木に願いをした。航海の安全、太宰府でちゃんと仕事ができるように、そして妻といっしょにいつまでもくらせるように……。そんなことをしながら鞆の浦を出発した。あのときは楽しかったなあ。しかし、太宰府で妻を亡くしてしまった。悲しい、寂しい、苦しい。こんなことばかり思っていた。妻のことを忘れようとするたびに、はっきりと思いだされる。だけど、いくらかは思い出になっていった。数年後、私は都へ帰ることになった。太宰府での仕事が終わった。帰る途中、船の上で鞆の浦のむろの木を見た。その瞬間、妻のことが急に思いだされた。妻が恋しくなる。でも、妻はもういない。この気持ちはどうすればいいのか。



(4) 帰京後、自宅で「『鞆の浦の思い出』を語る旅人の心」

B

潮風が冷たい季節だったが、鞆はいいところだった。海がきれいで、人々はやさしく、大きなむろの木もあり、なにより妻がいた。あのころは毎日が楽しかった。鞆は私にとってとても大切な場所だと思う。あそこに行けば、私の心の中の妻が言う。「私は元気に暮らしています。あなたもがんばって。」と……。また潮風が冷たい季節がくると、あの頃が再び思いだされるだろう。

448 磯の上に根這<sup>ねは</sup>ふむろの木見し人をいづらと問はば語り告げむか

(1) 「吾妹子」「妹」が旅人の妻のことを表していること以外、何の知識もない状態でとらえた「旅人の心」

C

むろの木の姿・形・風体に親しみを感じていて、自分の気持ちをわかってくれそうだと思う。語りかけている。(他界した妻への思い)  
この気持ちを道ゆく人々へ語り告げておくれ。



(2) ことばの意味・口語訳を知ったうえでとらえた「旅人の心」

C

妻はどのように過ごしているのだろうか。後に残された私をどのように思っているのだろうか。今も昔も変わらないむろの木の神よ、どうか語ってほしい。亡き妻のこと、老い先短い私のこと。

(3) 「鞆の浦」現地学習会後とらえた「歌ができるまでの旅人の心」

九州での任務を終えて再び都へ。この六十数年間、私は何をしてきたのだろうか。大伴家をたてるために、いろいろと尽くしてきたつもりだ。そしてこれからは、大納言という位をもって政治にうちこまなければ。

世の人にはさぞ栄華のように見えるだろうが、私はもう疲れてしまった。私を理解してくれる唯一の妻も、もう旅立って、ここにはいない。

- C 妻と共にこのむろの木に幸福を願い、九州へと旅立ったのに、むろの木、おまえは私の最も大事な願いを聞き入れてくれなかった。大納言の位は私には重すぎるのだよ。今はもう、静かに暮らしてきたい。

おまえに本当に神が宿っているのなら、せめてもの慰めに告げてほしい。

亡き妻は今何を思って私を見ているのか。

老い先短い私は何を心の支えにして生きていけばよいのか。



(4) 帰京後、自宅で『鞆の浦の思い出』を語る旅人の心

都にもようやく春が来たようだ。あの梅の古木のあざやかなこと。そういえば、あのときのむろの木も立派なものであったな。今でも、あの深々とした緑色を保っているのだろうか。

- C 私の人生も、そろそろ終わりのようだ。これはこれでよいのかもしれない。私のさだめというものだ。

人はみな、むろの木でいることなどありえないのだ。今になって、そのことをしみじみと感じている我が身が哀れでおかしい。

**学習をおえて**

大伴旅人が鞆の浦で歌をよんだことを知っていた生徒は1/5、校内に、むろの木と旅人の歌碑が存在することを知っていた生徒は皆無という状態から学習をはじめた。当然、中学三年生が万葉集の歌をよむことにはむずかしさがともなう。そこで、歌にこめられている「旅人の心」にふれることに焦点をしばって学習した。

「旅人の心」を

- (1) 歌についてほとんど予備知識のない段階
- (2) ことばの意味・口語訳を知った段階
- (3) 歌のよまれた現地「鞆の浦」を訪れた段階
- (4) 帰京後の「鞆の浦回想」という段階

という流れでとらえたが、生徒は、予想以上に、「旅人の心」にせまっていた。特に、(3)の「鞆の浦」現地学習会後において、生徒の反応は顕著であった。すなわち、歌のよまれた地に立ち、万葉の昔に自分の身をおくことにより、「旅人の心」にいつそう近づくことができ、また生徒各自の旅人



像をつくることができている。

スライド・ビデオ等の視聴覚機器の利用もそれなりの学習効果は期待できるが、歌のよまれた地を訪れることにより、郷土の風景の中に歌があることを知り、無理なく古典の世界へ足をふみ入れることが可能になるといえよう。

### 〈資料〉 教材

万葉へのいざない 「<sup>とも</sup>鞆の津とむろの木」—大伴旅人物語—

師走の<sup>とも</sup>鞆の浦、冷たい潮風に吹かれながら、<sup>せんすいしま</sup>仙酔島への渡し場から<sup>たいちようろう</sup>対潮楼を見上げるとき、一つの歌碑が目に入ります。——

吾<sup>わぎもこ</sup>妹子が 見し鞆の浦の むろの木は 常世<sup>とこよ</sup>にあれど 見し人そなき

730年（天平2年）12月に、<sup>おほとも</sup>大伴旅人がよんだ歌です。遠い昔、わたしたちの郷土、鞆の浦を、大伴旅人という万葉の歌人が訪れていたのです。旅人は、当時、武力をもって朝廷に仕える大伴氏一族をたばねる立場にあり、また風流を好む人でもありました。

太宰帥（太宰府の長官）の勤務を命じられた旅人は、728年（神亀5年）正月、64才で、年老いた妻、<sup>おほとも</sup>大伴郎女を伴って、<sup>なに</sup>難波津（大阪の港）から瀬戸内海を船で西に向かいます。途中、鞆の津に立ち寄り、美しい島々の景色をたのしんだことでしょう。万葉の昔から、鞆の津は、東西からの潮のぶつかり合う潮待ち・風待ちの港として栄えていたのです。そこで、二人の目にしたもの、それは大きなむろの木です。むろの木は、人間に長寿と幸せをもたらす神の木といわれ、老夫婦は、これからの航海の安全と、二人の行く末の幸せを祈ったことでしょう。

旅人は、665年（天智天皇の4年）に生まれました。太宰府でよんだふるさとをなつかしむ歌からは、若き日、<sup>とみ</sup>跡見の庄（現在の奈良県桜井市）ですごした日々がしのばれます。多感で幸せな青春時代を送り、妻大伴郎女との恋の花も開いたことでありましょう。

333 <sup>あさぢ原</sup>浅茅原つばらつばらにも <sup>も</sup>思へば <sup>さと</sup>故りにし <sup>さと</sup>郷し思ほゆるかも

334 わすれ草わが <sup>ひも</sup>紐に付く <sup>かぐやま</sup>香具山の <sup>も</sup>故りにし里を忘れむがため

香具山のみえる跡見の庄、それは忘れようとしても忘れられず、自然に思い出されるふりにし里なのです。

旅人の歌が、万葉集にはじめて登場するのは、724年（神亀元年）3月、60才の時、聖武天皇に従って、吉野に出かけた時の歌です。

316 昔見し象きさのきがは小河を今見ればいよよ清きよけくなりにけるかも

かつて訪れた吉野山のふもとにある象の小川を再び目にしている旅人の姿が浮かんできます。昔感動した小川の清らかさ、今日の前にある小川は、以前にもまして清く感じられ、流れる水の音まで聞こえてくるようです。

太宰府に着いてしばらくして、妻大伴郎女を病で亡くします。旅人の悲しみはひととおりではなかったでしょう。

438 愛うつくしき人のまきてしききたへのわがたまくら手枕をまく人あらめや

妻が亡くなって、数十日たったの歌です。いとしい妻が枕にして寝た私の手を枕にする人は妻以外にはいないと、その悲しみを率直に歌います。

同じ頃（6月23日）によんだ歌があります。

793 世の中は空むなしきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

仏の教えによって、世の中をむなしきものだと分かってみても、わたしの悲しみは薄らいでいくどころか、かえっていっそう強くなってしまふ。この苦しみをいっただうすればよいのだろうか、旅人は妻の死にもだえ、悩みます。

当時、筑前国の国司として太宰府にいた山上やまのうへのおくら憶良も、旅人の妻の死を悼んで歌をよんでいます。

798 妹いもが見しあみち棟の花は散りぬべしわが泣なみだく涙なみだいまだ干ひなくに

彼女（旅人の妻）のながめていた、あの棟（せんだん）の花をみながら、彼女の死を悲しむわたしの涙はいつまでもかわかないだろうと、その思いをよみます。

旅人は、太宰府時代に、「酒を讃める歌」13首をよんでいます。中国の影響を受けて、即興的につくられたものと思われていますが、その中には、人生に対するさまざまな思いがこめられています。そ

のうち、いくつかをとりあげてみましょう。

338 験しるしなき物を思はずは一ひとつき杯の濁れる酒を飲むべくあるらし

348 今の世にし楽しくあらば来きむ生せいには虫に鳥にもわれはなりなむ

349 生者いけるものつひにも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあらな

どうにもならない物思いをするよりは、一杯の濁った酒を飲むほうがよいという旅人の物思いの深さ、来世には、虫や鳥に生まれてもいい、生きている者は必ず滅びるものだということを前提として、今生きているこの世を楽しもうという旅人の悲しい願いがうたわれています。が、酒などでまぎらすことのできない旅人の思い（亡妻への悲しみ・都恋しさ・権勢欲）も見えかくれしているようです。

730年（天平2年）正月13日、旅人は自宅に人々を招いて、梅を観て楽しむ宴会を開きます。

822 わが園に梅の花散るひさかたの天あめより雪の流れ来るかも

梅の花の散るようすを天から降って来る雪であるのかと、明るくおおらかによんでいます。

また、筑紫の冬に雪を見て、

1639 沫雪あわゆきのほどろほどろに降り敷しけば平城ならの京みやこし思ほゆるかも

沫のような雪がうっすらと地面に降り敷くのを見ての望郷歌ですが、その気持ちは前歌と同様のびやかです。

730年（天平2年）10月、旅人は中納言から大納言へ昇格します。（大納言とは、今の副総理大臣くらの役職にあたります。）そして、その年の12月、旅人は都へ帰ることになります。

439 還かへるべく時は成りけり京師みやこにて誰たが手本なもとをかわが枕まくらかむ

440 京なる荒れたる家にひとり寝ば旅に益りて苦しかるべし

出発する時のよろこびとともに、都のわが家に帰ったあと予想されるひとり暮らしの苦しさをよんでいます。

旅人の乗った船は、瀬戸内海を波にゆられて東に向かいます。途中、鞆の津にたち寄ります。筑紫に下るとき、幸いをねがって、妻と二人でながめた大きなむろの木、今その妻は、旅人の傍らにいません。ひとりでむろの木をながめている旅人の心はどのようなものであったでしょう。

446 吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき

447 鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘れえぬやも

448 磯の上に根這ふむろの木見し人をいつらと問はば語り告げむか

むろの木をながめるたびに、かつていっしょにながめた妻を思い、その姿を追いかけています。幸せをもたらすといわれる神木であるむろの木をながめることにより、かえって妻の死への悲しみ、いのちというものについての思いを深くします。

さらに、兵庫県の敏馬の崎をすぎる日にも、旅人は同様の思いをもちます。

449 妹と来し敏馬の崎を還るさに独りして見れば涙ぐましも

450 往くさには二人わが見しこの崎を独り過ぐればこころ悲しも

つらい長旅をおえて、なつかしい都のわが家に着きます。

451 人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

452 妹として二人作りしわが山齋は木高く繁くなりけるかも

453 吾妹子が植ゑし梅の木見るとこころ咽せつつ涙し流る

旅の苦しさよりも妻を亡くしたことに苦しみ、妻と二人で作った思い出の庭のむなしさを茂った木々に感じ、妻の植えた梅の木に対する思い以上に、植えた妻の死を嘆いているのです。故郷の家に帰って、その家に対するなつかしさよりも、かえ

ってその家を通して感じる妻を失った悲しみが伝わってきます。

帰京後の731年（天平3年）、病がちであった旅人が、奈良の都にいて、ふるさとをなつかしく思ってよんだ歌です。

969 しましくも行きて見てしかかむなび神名火のかち淵はあ浅せにて瀬にかなるらむ

731年（天平3年）7月25日、旅人は67才の生涯をしずかに閉じます。

——強い北風の中、はしりしま走島へ向かう連絡船から鞆港をふりかえる時、万葉の昔、旅人と妻の二人が見た大きなむろの木が見えるような気がします。旅人の歌が、今もたしかにわたしたちの心に生きつづけているからでしょうか。

（和歌は、「日本古典文学大系・万葉集」岩波書店 による。）